

ハリオアマツバメ

Hirundapus caudacutus (Latham)
アマツバメ目・アマツバメ科

【福井県カテゴリー】新：要注目

旧：—

【環境省カテゴリー】—

選定理由

1990年代以前は、九頭竜川中流域や経ヶ岳等の山地帯で、春の渡り時期～夏季にかけて、毎年飛翔する姿が目撃されたが、2002年以降の記録件数は12件しかなく、今後の生息状況に注意を要する。

種の特徴

全長20cm。アマツバメより大形で、体は太く翼の幅が広く長い。尾羽は角尾で、アマツバメの凹尾と異なる。額、喉、下尾筒は白く、三列風切の一部と背の中央は灰白色で、体は黒い。全鳥類の中で最も速く飛び、飛翔性昆虫類を捕食する。

分 布

夏鳥として、本州中部以北の低山帯～高山帯に局地的に生息し繁殖する。本県では、春～秋にかけて、主に奥越を中心に確認されているが、繁殖は確認されていない。

生息を脅かす要因

繁殖の可能性がある赤兎山や経ヶ岳等の奥越の山地帯での調査が十分でなく、生息状況を把握する調査が必要である。

市町別 生息情報	若狭町	おおい町	高浜町	美浜町	小浜市	敦賀市	越前町	南越前町	池田町	永平寺町	坂井市	越前市	あわら市	鯖江市	勝山市	大野市	福井市
					○						○					○	○

ダイゼン

Pluvialis squatarola (Linnaeus)
チドリ目・チドリ科

【福井県カテゴリー】新：要注目

旧：—

【環境省カテゴリー】—

選定理由

本種は砂浜や干潟等の環境を好むため、1980年代の福井新港の造成期には定期的に飛来していたが、2002年以降は2件しか記録がなく、三里浜、久々子湖、小浜湾等での今後の動向に注目する必要がある。

種の特徴

全長29.6cm。夏羽では、顔・喉・胸・腹が黒く、頭から上面は黒褐色と白色の斑があるが、冬羽や幼鳥では顔から腹の黒色がない。よく似たムナグロは、頭から上面が黄褐色と黒色の斑であることで識別できる。干潟や砂浜で、甲殻類やゴカイ、草の種子等を食べる。

分 布

日本には旅鳥または冬鳥として干潟や砂浜に渡来し、ムナグロのように内陸部の水田には飛来しない。県内では飛来環境が極めて少なく、福井新港造成後の記録は著しく少ない。

生息を脅かす要因

本種の定期的飛来地であった福井新港では、シギ・チドリ類の多くが、造成途中の池の岸辺を採餌と休息に利用した。新港の造成は三里浜の面積を縮小させ、彼らの中継地は悪化したままである。シギ・チドリ類は減少しており、中継地造成等の対策が必要である。

参考文献 福井県自然環境保全調査研究会（1998）、中村・中村（1995）、大西・真木（2000）、高野（2016）

市町別 生息情報	若狭町	おおい町	高浜町	美浜町	小浜市	敦賀市	越前町	南越前町	池田町	永平寺町	坂井市	越前市	あわら市	鯖江市	勝山市	大野市	福井市
				○		○					○						

コチドリ

Charadrius dubius Scopoli
チドリ目・チドリ科

【福井県カテゴリー】新：要注目

旧：県域準絶滅危惧

【環境省カテゴリー】—

選定理由

県内では、平野部の農耕地や河川敷等での確認件数は多く、個体数も現状維持されている。また繁殖には改変された荒地を利用するため、生息環境が悪化しているわけではないが、不安定な環境に生息していることから、今後の動向に注目する必要がある。

種の特徴

全長16cmで、日本のチドリ類の中では最小種である。イカルチドリに似るが、嘴や足が短く、目の周りの黄色のリングが目立つ。飛翔時に翼帯は出ない。砂利場や農道の砂利道で営巣し、8月頃の休耕田等では幼鳥が頻繁に確認される。イカルチドリよりも細かな砂れき地を好む。昆虫類を食べる。

分 布

九州北部に夏鳥として繁殖するが、本州中部以南では少数が越冬する。本県でも夏鳥として河川敷の中州、農道、工事現場の砂利場、休耕田等で繁殖する。

生息を脅かす要因

繁殖は改変された荒地等の不安定な環境で行われるため、繁殖期の改変や人間の接近は、繁殖成績に影響を与える。繁殖期に本種をみつけた場合には、その場を離れる等の配慮が必要である。

参考文献 福井県自然環境保全調査研究会（1998）、福井県（2002）、中村・中村（1995）、大西・真木（2000）、高野（2015）

市町別 生息情報	若狭町	おおい町	高浜町	美浜町	小浜市	敦賀市	越前町	南越前町	池田町	永平寺町	坂井市	越前市	あわら市	鯖江市	勝山市	大野市	福井市
	○			○	○	○				○	○	○	○	○	○	○	○